

死んだ時間

佐野洋

講談社

死んだ時間

佐野 洋

講 談 社

死んだ時間

著者の了解により
検印廃止

© 佐野 洋 一九六三

昭和三十八年十一月十日 第一刷発行
昭和三十八年十二月二十五日 第二刷発行

三二〇円

著者 佐野 洋

発行者 東京都文京区音羽町三ノ一九
野間 省 一

印刷所 東京都文京区武島町二二
慶昌堂印刷株式会社

発行所 株式会社 講談社
振替 東京 三九三〇

電話東京(四三)一一一大代表

(製本 大進堂)

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

死んだ時間
目次

第一章	第二章	第三章	第四章	第五章	第六章	第七章
動	想	混	焦	癸	葛	摸
搖	像	乱	慮	起	藤	索

第八章 徒勞

一〇

第九章 分析

三

第十章 燭光

二七

第十一章 抵抗

二五

第十二章 背信

二四

第十三章 暗鬼

一八

第十四章 惑亂

二四

装
幀

沢
田

重
隆

死
ん
だ
時
間

第一章 動 揺

1

そのダイヤルを回し終るとき、私は、きまって、息をつめていたようだ。考えてみれば、そうする理由はないのだが、あるていどの精神的緊張が、私の中にあることだけは事実であらう。

向うの信号音が、しばらく続き、やがて相手が出る。その相手の声は、二種類に決っていた。五十年輩の男の大きな声か、その細君らしい女性の、どこか親しみの感じられる声。

私は週に、二、三回はそのダイヤルを回すのだが、男が出た場合には、軽い失望を感じる。ついていないなという程度の気持であった。

彼は、多少、耳が遠いらしい。だから、私が、「恐れ入りますが、時任ときとうさんをお願い致します」と言ったとき、必ず、

「え？ もし、もし」

と聞き返すのであった。

そのとがめるような口調が、私の神経にこたえる……。『年上の未亡人についた虫』私をこう考え、いやがらせのために、わざわざ聞き返したのではないか？ 最初にそんな印象を持ったせいとか、私は彼のその声を聞いたとたんに、時任杏子きよこに電話したこと自体を悔むような気持になるのだった。

杏子の話によると、彼は杏子のアパートの家主で、退職官吏であった。

「親切ないい大家おおやさんよ。干渉してみたことは一切言わないし……」

杏子は彼をそう評していた。恐らく、それは正しいであらう。少なくとも、私には、それを反駁はんぱくする資料はない。その大家なる人物に、一度も会ったことはないのだ

から……。

だから、私の電話に、必ず聞き返すのは、彼が耳が遠いという単純な理由からであろう。そして、それには、私の側にも責任がないわけではなかった。

私は、その電話を、私が勤めている内科医局のすぐ前にある赤電話からかけるのだが、背後を絶えず先輩や同僚の医局員、さらに看護婦たちが通る。彼らに聞かれたくないという意識があるため、私の声はどうしても小さくなるのだった。従って、ただでさえ耳の遠いその家主が、とがめるような口調で問い返したくなるのも、言わば当然だったのだ。

その日、つまり、四月十三日土曜日に電話したときも、相手の声は男であった。

「恐れ入りますが、時任さんを願います」

「え？ もしもし……」

「時任さんを願います」

私は心持ち声をはり上げた。

「ちょっと待って下さい」

送受器を電話器のそばに置く音、そしてブザーを押す音が聞える。ブーと一回だけ長く続く音が、杏子の部屋に対する合図になっているのだそうだ。

普通、このブザーが押されてから、約四十秒後に、「どうもありがとうございます」

という、杏子の家主に対する挨拶が聞え、やがて、電話口には彼女が出るようになっていた。

だが、その日は、待つ間が少し長いようであった。時計を見ていたわけではないが、いつまで経っても、彼女が電話に出る気配はなかった。

やがて、ブザーがもう一度鳴った。家主が念のため、に、押してくれたのであろう。

私は、腕時計を見た。正確に一時である。秒針が規則正しく、文字盤を撫でていた。

二度目のブザーから、一分半が経った。

「もしもし、いくらお呼びしても来ませんねえ。お留守じゃないですか？」

「そうですか、すみません」

私は電話を切った。

それならそれでよい。私はこの土曜日、看護婦たちに庭球を誘われていた。彼女たちと、無邪気に騒ぐのも悪くはないだろう。

私は医局に帰ると、看護婦の一人に言った。

「おい、西内さん。きょうは、ぼくもいれてもらうよ」

「本当？ まあ素敵。先生はご都合が悪いというので、みんながっかりしていたのよ」

「だめだよ。そんなお世辞言っても負けてやらんよ」

「ひどいわ。そんなんじゃないわよ」

西内は私を睨む真似をした。

この医局で、私は『先生』と呼ばれている。しかし、私の資格は、教授でも助教授でも、講師、さらに助手でもなかった。職制上、正式な名称はないのである。便宜上、医局員という名が使われていたが、無給であった。大学病院は、一方に於て患者に対する施療をしながら、医学界の先端を切る研究をするように義務づけられ

ている。その両面の機能を完全に、いや完全とはいかぬまでも、一通り遂行するためには、とても文部省で決めた大学職員の定員では足りない。それだけでは、大学病院を信頼して、わざわざやってくる外来患者を診療することさえ、不可能であろう。

そこで、定員法には含まれない、『無給医局員』という制度が昔から生きているのだ。インターン、或いは医学部の大学院学生、或いは私のように、国家試験を通り、医師の資格をとったが、どこにも就職していないもの、さらに市内の病院にも勤務しながら、週に何回か大学病院に来て、医局を手伝うものたちがこの『無給医局員』の中に含まれていた。これは、むしろ制度の欠陥が生んだ奇型児には違いない。しかしそのことについて、私はとりたてて矛盾は感じなかった。こうした制度上の奇型児は、何も大学病院に限ってあるものではないだろう。一九六三年の日本の社会では、どこに行っても、それを目にすることができのではあるまいか？

例えば、時任杏子の職場がそうである。彼女は、渋谷

の料亭『とみた』の女中をしているが、そこでは固定給はわずかであり、むしろ客の飲食代に比例したサービス料と、客からのチップが、収入の主要部分だということであった。だから、わずかばかりの料理で、長い時間居坐っている客につくと、最も損をするわけである。客にしてみれば、席料を別に払うのだから、何時間いようと自由だと考えるかもしれないが、女中にとっては、あまりがたくない客なのである。

しかも社用族のつけは、その取り立てがすむまでは、サービス料も貰えない。取り立ては、それぞれ、係女中の担当だという。

「その上ね、社用だから、確実にはいるかと思っていると、そうとも限らないときもあるの。会計課に行くでしょう？　すると、これは会社の認めたものでないから、出席者の個人負担だなんて言われるの。しかたがないから、お客さんの一人ひとりに、請求書を書いて持って行くわ。でも、個人だったらすぐには払ってくれないもの。結局、ボーナスまでということになってしまふのね」

「ひどいもんだね。じゃあ、ただ働きということもあるわけ？」

と、その話を聞いたとき、私は言ったのだが、考えてみれば、私もただ働きをしているのだ。人の勤務の不合理を問題にする資格はないのかもしれない。

2

看護婦たちと、テニス・コートへ行く前に、私はもう一度、赤電話の前に立った。先刻の電話以降、三十分が経っている。その三十分の間に、彼女が帰宅して、私の電話を待っている可能性もあった。いちおう、たしかめてみようという気持である。

一時に電話をする約束だったのだから、その時刻に、在宅してない杏子の方に責任があるとは言える。しかし、例えば美容院に行ったところ、彼女の意に反して、時間を食ってしまい、急いで帰ったが、そのときは、すでに私の電話があったあとだということもあるだろう。

私は、そのように考えたのだった。

こんど電話に出たのは、女の声であった。

「すみません。たびたび恐れ入りますが、時任さんをお願いしたいのですが……」

同じ相手でないことが、私の気を軽くしたが、それでも、私はことさらに、遠慮した喋り方をした。

「時任さんですか？でも時任さんはお留守のようですよ」

「そうですか？ 実は、きょう電話する約束だったもので……」

「でも、雨戸が閉まったままですし……。お呼びすることはお呼びしますが……」

いつになく、とげのある口調であった。杏子のこと、彼女は何か腹を立てているのかもしれない。

ブザーが、先刻と同じように押された。しかしそれは空しかった。

「やはり、いらっしやいませんね」

と、相手は勝誇ったように言った。

「そうですか。では、加賀から電話があったとだけ、お

伝え下さい」

「はい、かしこまりました」

電話は先方から切れた。

そのとき、私は肩を叩かれた。

「先生、どうなさったの。元気がないみたい」

冷やかすように言って、看護婦の西内が私の顔をのぞく。

「え？ そんなことはないさ。さ、いこう」

私は強いて陽気な口調をとった。

「いいんですよ。無理なさらなくても」

西内は、白衣を脱ぎ、白ブラウスに、紺のタイト・スカートという、どこにでもあるB・Gスタイルになっていた。

のりの利いた白衣姿の看護婦は、美しく見えると言われているらしいが、私たちのように、そんな彼女たちに、終日取り囲まれていると、却って、白衣を脱いだ姿に美を感じるものだ。

「無理？ 何言ってるんだ」

と言いながら、私は西内の肩に手をかけ、抱きよせるようにした。

それは、自分でも意外な行動であった。私の意志とかかわりなく、手がそのように動いてしまったという感じである。これまでの私は、看護婦を相手に、へらず口を叩くことはあっても、こんなに親しげな行為を見せたことはない。

「あら！」

西内は、からだをひねって、私の手から逃れた。赤くなっていた。

なぜ、私はあんなことをしたのであろう。白衣を脱いだ彼女に、女性を感じたのだとしても、少し唐突な行為のような気がする。私は、テニス・コートの方へ、西内と歩いて行きながら、そのことを考えていた。

「先生、先生にはお姉さんがいらっしゃいますの？」

不意に、西内が聞いた。

「姉が？ いや、なぜだい」

「じゃあ、人違いかもしれないわ。気になさらないで」

「妙だなあ」

私は、しかし、西内がそんな質問をした意味がわかるように思った。

——二週間ぐらい前の日曜、私は杏子と銀座のデパートを歩いた。彼女が私にネクタイのプレゼントをしたいと言ったのである。そのとき、私は西内の姿を、ちらっと見かけたのだった。人混みの中だったから、言葉もかけなかったが、恐らく、西内の方でも私を認めたのである。そして、私が女連れであり、その連れが私より年長であることも、とっさに見てとったに違いない。それが、今のような質問になったものと思われた。

杏子は、私より四つ年上の三十歳であった。三月の初めに三十歳になったのだが、その誕生日に、私は、
「おめでとう」と言って、恨まれた。

「あなた、本当におめでたいと思っているの？」

「本当にと言われると困るけれど、誕生日はおめでたいということになっているじゃないか」

「今日で、あたしが、幾つになったか知っている？」

そのとき、彼女が、どんな表情をしていたか、会話が電話であったから、私には知るよしもない。しかし、彼女が自嘲めかしたじょうだんを言っているのではないことだけは、よくわかった。

「うん。いいじゃないか、女盛りだ」

「いやあよ。今朝、目が覚めたとたん思ったわ。とうとう、あたしも三十女かって……。さびしいものよ。こぶつきの三十女。夢の持ちようがないわ」

——日頃、杏子はハンド・バッグの中に、小さな写真を一枚秘めていた。

彼女が、バッグからハンカチーフを取り出そうとした折、一緒に出て来たのが、私の目にそれが触れた最初であった。

「あ！」

杏子は、あわてて、それを隠そうとした。

「何だい？ 写真だね。見せてよ」

「だめ」

と、彼女は、それを後手に隠した。

そう隠されると、私は却って見たくなかった。

そのとき、私たちは千駄ヶ谷の旅館の一室にいた。そこが密室であり、少々の物音は外へ聞えないという安心感があったから、私は大胆になった。

なかば、戯れるように、彼女に襲いかかり、その手から写真を奪ってしまった。杏子の方でも、それを破られたくないという意識があったためか、烈しい抵抗は見せなかった。

「あれっ？」

取り上げた写真を見た瞬間、私は意外な思いに囚われた。

私は、その写真には、彼女自身が写っており、しかし写されかたが悪かったので、見せるのを嫌がったのだろうと想像していたのだが、この予想は、見事はずれてしまった。どこかの遊園地、或いはデパートの屋上などで撮影したものらしい。十円入れると揺れる木馬にまたがった、三つぐらいの男の子が、いかにも嬉しそうに笑っていた。

「これ、どこの坊やだろう？」

「あなた……」

と、杏子は旅館の浴衣の裾を直しながら、烈しい瞬きをして、私を見つめた。

「気がつかなかった？」

「え？ 何の話だい？」

「あたしのからだ……」

杏子は坐り直して、膝頭をことさらに固く合わせた。

「からだが？」

「そう。あなた、お医者さんなんでしょう？ それで

も、わからなかったかなあ……。お医者さんでなくても、わかる人はわかるわ」

その、いくらか赤味のさした顔を見て、私にも、杏子の言葉の意味が理解できた。

「じゃあ、これ、君のお子さん？」

「そう。幻滅？」

「いや、幻滅なんてことはないが……。しかし驚いたなあ……。そうか……。こんな大きな坊やがいたの？」

「そう。もうすぐ三つになるわ。英一というの」

「ふうん、そうかねえ……」

私は、その会話の少し前に、二人で共にした行為を思い出そうとした。その行為から、三十分とは経っていない。私の中には、まだ感覚の記憶が残っているはずだった。彼女のあのからだは、こどもを生んだ経験があるのか？

「いま、北海道の実家に預けてあるの。学校に行くころには、引きとって、一緒に暮したいと思っているのだけれど……」

「そう……。驚いたな。なぜ隠していたの？」

「隠していたわけじゃないわよ。ただ……。でも、隠していたのかもしれないわね。こどもがいるなんてこと知ったら、あなた、あたしとつき合ってくれなかったのじゃない？ わかったとたんに逃げて行っただと思うわ。それがこわかったの……」

杏子は上眼使いに私を見つめた。挑むような表情とは、こういうものをいうのだろうか？ 意識的なコケト